

# たぐみ

## Craftsmanship

特集 笠原良子作陶展

第24号

### 「蝶が飛ぶ 葉っぱが飛ぶ」 河井寛次郎の本

民藝運動の創始者の一人で、陶芸家の河井寛次郎の随想集「蝶が飛ぶ 葉っぱが飛ぶ」が講談社文芸文庫から出た。河井の随想集としては「火の誓ひ」や「いのちの窓」「六十年前の今」「炉辺歎語」(対談)などあるが、今回は昭和二年(一九二七)から晩年まで、折りにふれて書き、語ったもののなかから、今まであまり紹介されていないものをまとめたものである。

河井の文章が人の心を打つのは、活き活きした観察力と詩情に加えて、明日への希望と洞察に満ちているからであろう。彼の書くものにはいつも問題意識があり、そして必ずそこから答えを導き出そうとする。そこに私は時代を超えた彼の魅力をみる。それに河井はいつも心とからだが自由だから、いう言葉も自在無碍で、断片だけを捉えると真意を見失うことがなくもない。

本書の一章「民族造形の祈願」のなかで、江戸時代の町人学者富永仲基の

言葉を引用して河井はこう書いている。その一つは、「異部若字必ずしも和会しがたし」。物事は一元で決めたいけない。多元でいいのである。もう一つは、「言葉に人あり、言葉に時あり」。

人によって、時代によって言葉の意味はちがってもいいのだ。

また河井は「莊子」からある挿話を紹介している。孔子の弟子の子貢が地方を旅したときのこと。ある百姓が井戸から手桶で水を汲んで田圃に水をやってのを見て、はね釣瓶という便利なものがあるのになぜ使わんのか、と聞くと、百姓のいうのには「そんな便利なものを使うと横着心が出ていかん」といつて一向に改めなかったという。河井は「これはちやうど今、私の考えている民藝の問題にも当てはまるのじゃないかと思う」と結んでいる。

ほかにも教わることは多々あるが、ともかく一読をおすすめしたい。巻末の長女須也子による解説「時空を超えて」も、父寛次郎の素顔を語って余すところがない。

(志賀直邦)

たくみ企画展

## 笠原良子作陶展

会期 平成十八年四月二十二日(土)～二十七日(木)  
四月二十三日(日)は営業いたしません。  
会場 たくみ二階サロン

営業時間 十二時から十九時まで (日曜日・最終日は十七時半まで)



口クロをひく笠原良子さん

### 笠原さんに期待する

島岡 達三

笠原さんは日本大学芸術学部卒業後、益子の窯業指導所の伝習生として一年間、成形の基本を勉強して私の許へ入門した。

やさしい顔立ちに似ず男勝り、積極的に仕事に取組みこの六年間目ざましい進歩をとげ、今では私の出す見本を殆ど完全に作り上げる様になった。

このたび卒業制作に当たり、自分の思い通りの作品をのびのびと作っているが、どのような作品が生まれてくるか楽しみである。

平成十八年四月吉日

刊  
月  
たくみ  
No. 1

昭和27年10月号

国際工藝家会議と

柳・濱田両先生

村岡 景夫

去る七月十七日から二十七日までイギリスのデボンシャー州にあるダーティントン・ホールで開かれた第一回国際工藝家会議に東洋から招かれたただ二人の代表として、柳、濱田両先生は志賀直哉氏と同道、五月三十一日羽田発、途中バンコック、イタリヤの各地とフランスから南下してスペイン、ポルトガルを廻ってイギリスに入り、十七年振りにバーナード・リーチに再会、相たづさえて国際会議に出席されました。この会議は陶器と染織との二部門に関する凡そ二十カ国近くから集まった学者、評論家、美術館員、指導員、

工藝関係の実業家達百五十人近くの参加者があり、そのうちに陶工が四十人近くあつたそうです。地元の英国人が一番多く、次は米国人で、ドイツからも相当に出席者があり、欧州のほとんどから集まつていたのに、東洋から招かれていたのは柳、濱田両先生だけだつたそうです。

もともとこの会議は日本になじみの深いバーナード・リーチ氏が中心になつて開かれたものなのですが、リーチ氏は先年「陶工の本」を著して以来、陶工としていま欧米で知らぬ人のないほど著名であり、欧米の工芸界に大きな影響を与えている人で、恐らくウイリアム・モリス以来の大きな存在であると言われております。

このリーチを通じて柳、濱田両先生は既にしばしば欧米人の間に紹介されていたので、今度の会議に集まつた人達は皆互いに旧知の様な思いがしたそうです。その上濱田先生の口クロや絵付けの実演は皆から驚きをもつて見ら

れ、柳先生の数回の講演はその東洋的な、仏教的な考え方が西洋的なもの、考え方にのみなれている人々に大きな問題を投げかけたようです。

リーチ氏は今度の会議への両先生の出席によつて我々西洋人が「東洋の内からの声」を直下に聞く機会が始めて与えられ、その驚異の気持ち十日間の会議中打ち続いたと感激の言葉を送つて来ております。その上に民藝館の蒐集品を撮つた三百枚のカラー・スライドと「日本の陶磁器」という映画とは非常な感興を呼び、数回映写することを求められたそうです。

戦後世界の各地で国際的な諸種の会議が幾度か開かれたことです。然し今度の会議の様に日本の代表、日本の文化が会議を主導し、感激と畏敬とで迎えられたことは恐らく未だなかったことでしょう。両先生のご努力を多すると同時に、今ようやく半ば終つた今度の旅程の前途に大きな期待が懸けられております。(同志社大学教授)

刊  
月  
ちくみ  
No. 11

昭和28年11月号

この夏一ヶ月ばかりの信州滞在は近頃にならない素晴らしい毎日でありました。一つの仕事についてこれほどぎざり話し合った事はこれまでにはなかった事でありました。リーチも濱田も柳も多分こんな事は始めてであろう



木彫を指導する河井寛次郎

## 信州入山辺の立てつた暮らし

河井 寛次郎

と思います。滞在中松本の諸兄はもとより宿の方々や各地の人々から受けた数々の好意は、いつまでも愉しく持ち続ける事でありましょう。

滞在中色々な事の中でも、松本の諸兄のひたむきな仕事振りには深い感銘を受けました。ことに木工の仕事はなまやさしい事ではなく、大勢の協力いる困難な仕事なのですが、打ち込まれている決意と熱意とお互いの厚い友情がそれをささえて、色々な困難を乗り越えられている事は何にもまして素晴らしく思いました。

また宿のぐるりの山や谷の急斜面に群がった農家の暮しからも、また多くの知らなかった事を聞くことが出来たのは非常な仕合せでありました。この辺の急斜面の農業はどこにでもそうざらに見られるのではなく、隣家の屋

根に足がつくほどな処に住みなさされている、こんな暮しには圧倒されるものがあるのです。

部落もそうですが田も畑もまたそうなのです。梯子農とでもいつたらいいかも知れませぬ。事実梯子でも使はなければあんな畑なんか手入れも収穫も出来そうにもないのです。この人達からは坐つたり寝ころんだり出来ない、立てつて暮しの素晴らしさを見せられました。

我々はややもすると考えだけでものを片付けようとすると随分失敗しています。谷を隔てた向うの人は呼べば答えられそうな処に住んでいながら、実際会いに行く肉体上の距離は大変なのです。我々はいま狭い土地に大勢住んでいる事をいつも頭の中においています。しかし実際に身体で歩いてみると如何に広大な土地、しかも人のすくない土地に住んでいるかという事に気が付くのです。そこに今後の我々の土地がなければならぬのです。

それはそうと滞在中は毎日のように宿のぐるりのこんな村を、夕方になると皆で歩きまわりましたが、歩く毎にいろいろなものが次々に見付かるのです。近くの村だけでも何十かの素晴らしい道祖神や庚申像や地藏尊像に出会いました。信濃一國で七千体からのこんな石像があるといわれるのですが、一体こういうものはどういうものなのでしょう。あるものはこれ迄の密教の諸像の中にもかつて見た事もない不可思議極まるものさえあるのです。

それから入山辺の橋倉や南方なんかは思い出すだけでも愉しくなる部落なのです。何と無数にあるこんな部落。糸魚川街道若槻の草葺の大きな農家群のすばらしさ。ここから続く中郷から牟礼古間へかけての目のさめる様な景観。一茶が未だ生きていた柏原一茶は断じて歴史上の剥製品ではないのです。

戸隠の坊舎や本山の古駅は何を吾等に伝えようとしているのでしょうか。下

諏訪の旧本陣かめやや、近くに残っている旧幕時代からの湯治宿。下諏訪社境内のみごとな郷土工芸館や上諏訪の牡丹屋や考古館。田も畑も村も町もすべてすばらしいという暮しが集めつくされているかの様な安曇野の大傾斜面。その安曇野鳥川の旧家山口邸のあの松と家と庭とはどうしたなら人々に伝える事が出来るのでしょうか。

### 昔の『月刊たくみ』

について

『月刊たくみ』は昭和二十七年十月に第一号が出され、二十九年の十二月号まで二十七号が発行された。翌年一月号から「民藝」と誌名を変え、東京民藝協会、駒場の日本民藝協会の機関誌と順次移りつつ今日に至っている。

民藝運動の定期刊行物としては、戦後の復興の中で「工藝」「月刊民藝」が復刊するがやがて終刊、そのあと

同じ村の多角農浅川家には綿羊が沢山いるのですがこれから何が出るのでしょうか。六千尺の美ヶ原は次ぎ次に登ってくる人達は何という大声で話している事でしょう。

信州も日本のどの国とも一緒で何があるのか何が出てくるかどうしたならいいのか未だ解っていない国なのであります。(松本市外入山辺霞山荘にて)

の「日本民藝」も四号で停刊、間もなく「民藝通信」が協会本部とたくみの協力で三年ほど発行された。その停刊を受けての『月刊たくみ』の発行であった。

したがって『月刊たくみ』はその頃ただ一つの民藝の定期刊行物であった。だから柳、河井、濱田ら諸先生方の動向にも詳しく、またその玉稿も掲載することが出来た。半世紀経った今、運動資料としても貴重なそれらの文章を紹介していきたいと思う。

「アジア民族造形ネットワークシステム」の創設と展開(二)

## アジア諸民族の生活文化が世界を変える

金子 量重

中国II漢民族+56少数民族

人口13億の中国は漢民族だけでなく56の少数民族が支える多民族国家だ。これをまとめるには、政府は未だに全体主義的権力による統制が必要と考えられているようだ。だが諸民族は長い歴史をもつ伝統の生活様式を守っている。一部は東南アジア全域に移住し、ヤオ族はザオ、ミャオ族はメオやモンと名を変える例もある。揚子江(長江)を境に北は砂漠で“土間式住居”、南は低湿地なので高床住居に住む。中国人とはいえ民族ごとに歴史も生活文化も異なる。雲南省には独自の生活信条をもつ、農、猟、牧などに携わる26民族が共存する。麗江の納西(ナシ)族は、東巴(トンパ)教とチベットのボン教に近い象形文字をもつ。『三国志』の

故地四川省には、大涼山(二〇〇〇m)

中に住むイ族の漆器造りの里がある。彼らはすべての食器を多彩な漆で装い、夕食には華やかな器が勢ぞろい。男は鷹の脚つきの高杯で客と腕を組んで酒を酌み交わす。女性は藍染め百褶裙(プリーツ・スカート)を板締めで造る。奴隸制が存在したので奴隸博物館があり、漆塗りの甲冑や馬具などを展示。また商代の甲骨文字に出自のある、北方遊牧民の末裔のチベット系羌族など、ここも多民族地域である。

鳥居の源流と金彩の食籠

熱帯の活力源であるキンマの匂いに満ちた街を歩き、屋台のトムヤムクン(タイのえび辛スープ)に瞬時の涼を求める。フォー(ベトナム)、クエツティオ(タイ)、カウスエ(ミャンマー)、

ミー(インドネシア)などお国自慢のそばを満喫。新鮮な魚介類や果実の香りに誘われて、東南アジア全域を探訪。彼らの精神基盤の霊魂信仰(タイはピー、ミャンマーはナツ、フィリピンはアニト、マレーシアとインドネシアはスマンガット)が心の糧となり、樹霊や木・石彫の信仰像を礼拝する。そこへインドからヒンドウ教と仏教が渡来し、タイ、ミャンマー、ラオスは敬虔な仏教徒の国となり、スコータイ、パガン、ブランパバンには仏跡や寺塔が林立する。ベトナムは二〇〇〇年にわたり中国と戦闘と交流を重ねたので、その影響は濃く道教廟が目立つ。のちにマレーシアやインドネシアはイスラムを国教と定め、西欧の植民地政策は伝統の生活文化を破壊し、強制的にキリストに改宗させられた住民も多い。

タイ北部の山岳地帯に住むアカ族は、集落の入り口にロツコーンとよぶ門を建てて。二本柱の上の笠木には、





泥絵（ワールリー画）インド

竹で造った模擬鳥数体がのっている。まさに「鳥が居る」のである。鳥は人に夢を抱かせ神の使いと崇め、村への飛来は瑞兆だとの思想に由来する。これぞ神社に立つ鳥居の源流か。中国の磁州窯や龍泉窯の影響を受けた各地の古窯址を探訪、宋胡録、安南、交址などの陶磁が渡来し近世日本で珍重された。同時にインドネシア原産の緋（イカット）や模様染め（パティーク）は、

除魔招福といった霊性豊かな抽象模様が布を覆う。バリアカ族の「グリーンシオン」、パミンギル族の葬礼用浮織の「パレバイ」。その傾向はマレーシア・イバン族の「プア」や、フィリピン・スバニ族の（ダグマイ）やバゴボ族の「ティナラク」にまで及ぶ。だがわが国に入るや霊的模様は消え、『更紗』とよび女心を捉え、色や模様を日本化しながら桃山・江戸期の服飾に変化をもたらす。やがて民族独自の織物や染物が地域産業として栄える。

スマトラ島のバタック族は独特の文字で書いた木皮本をもつ。海底で神秘に輝く貝に魅せられた匠たちは、それを張り合わせて箱を造る。さらに真珠の母貝や青貝の上質な部分を選んで、九折盤や文箱や結納箱に、貝片に精細な模様を刻み象嵌して螺鈿を造る。ペトナム、タイ、カンボジアには優れた螺鈿が多い。また包容力に富み造形自在な竹（バンブー）はインドネシア語の利点を生かした竹細工。ミャンマー

では編んだ籠や裂いたヒゴを巻いた大小の器に、黒や朱漆を塗って籃胎漆器を造る。釈迦への『ヒンタ（霊鳥）付朱漆金彩ガラス貼献饌用食籠』や、木胎の『ヤマヤナ物語五曲屏風』（ライカー）は、世界に誇り得る漆の造形といえよう。

人間味あふれるインドの民俗絵画 八百万神に通じるヒンドウの神々が宿る、ヒマラヤを望むインド亜大陸を回遊する。シタールの音色は旅人に気だるさを誘い、種類の多い豆料理やカレーの辛さに元気をとりもどす。インドもまた有数の多民族国家だ。だから標準語だけでは政府の通達が伝わらなると聞いた。古代叙事詩の「ラーマヤナ」や「マハーバーラタ」に関わる造形も多い。インドの絵画といえは、ミアアチュールやムガルや、ラージプートは名高い。だが民族ごとに多彩な絵が伝承されている。暮らしの豊かさを願い、主婦が土壁に牛糞を塗り、米の粉を水に溶いた絵の具で描き、日



紙面キヤー ネパール

服した若者たちが仮面をかぶり、シバやクマリなど十三神に扮して街を練り歩く。大家族に嫁した新妻は多忙を極める。毎夜仕事が終わわり部屋にもどると、母から送られた土器の壺から菓子をとりだし、涙を流しながら嘔みしめる。

モリコシとよび、器

の出に祈るワールリーや、ピトラ、ラージワール、ゴンド、マドバニーなど、人間味豊かな民族絵画が描かれてきた。これらの絵は、古代人さながらに心の思いや願いや叫びを、独自の造形技法で自由に描いている。これぞまさしく「人間の絵」だと感動した。またヒンドウ教のタントラ（女性原理）は、ドウルガやカリー女神信仰に基づく、シャクティ（女の力）崇拜思想。人は神秘的な無数の機能を有し、その中の6個の中心叢（チャクラ）がすべてを結びつける。人体を信仰面から描いた

タントラ絵画は、人間の根源を示す「生」や「性」（リングとヨニ）に、真正面から取り組んでいる。信仰、ヨガ、心情、医学、哲学、生物化学を総合させる基盤をなすほど、インド独自の深遠な思想と造形力といえよう。ネパールではロクタというチンチウゲ科の手漉き紙に粘土と麻を等分に混ぜ、石膏型にはめて成形する。それに彩色した紙塑仮面（クワーバ）をネワール族の5代目チトラカールが造る。ふと歌舞伎や京劇の隈取の源流かと思う。

面には守護神のヒンドウの神像が刻んである。ヒマラヤに生きる女の悲しみと忍耐強さを秘めた壺だ。

イスラムの英知

ガシユガイ族の生命樹模様

アフガニスタンを皮切りに、ジブチやラクダに身をゆだねて、乾燥の砂漠化地帯を旅する。パーミヤンの大石仏（35 m、55 m）は東西の大佛龕にたつ。砂やぐらを築き壁龕を削りだし、<sup>すき</sup> 混ぜた泥土で肉付けし上から漆喰で仕上げる。堂々たる仏像群は住民のハザラ族はもとより、西アジアとインドを往来する旅人の心を癒したことであろう。壁には両翼をもつ白馬4頭が牽く。馬車に乗った太陽神が描かれている。「有翼の天馬」は北方アジアでは神の乗り物で、ギリシャ神話のペガサスから韓国の「天馬塚」にいたる広域に分布。メーデーに一〇〇〇余のウズベク族女性性は、多彩な緋太陽文（ハン・アトラス）を着て賑やかに行進。華やかな模様にわが秩父や足利銘仙を思い出





土器把手付壺（バクラッチ）トルコ

す。イランの宿では紺碧の天空に『アツラーは偉大なり』と、礼拝時を呼びかけるアザーンの響きに目を覚ます。モスクの広大な礼拝所（マスジド）に正座しキブラに向かって、礼拝するイスラム教徒の真剣な姿は、信仰心と団結力の象徴だ。砂漠で井戸を掘るために、地霊に祈る人たちに出会う。

ペルシア絨毯の産地だけに優品を見聞き、家庭で織るキリム、ジジム、ソマックに見惚れる。カシュガイや諸民族の娘たちは、生命樹や地域の伝説や花鳥を、多彩な色糸で織り込む。十六

年目にトルコへ。毎朝酸味の濃いヨーグルト（トルコ語）を堪能。容器の把手付壺と、魚と野菜を煮込む土鍋は秀逸だ。各地の大バザールは男の市場だが、イスラム世界の生活文化が一目瞭然。皮表紙のコーランや文学書入手。祖国をもたないクルド族に歓迎され、娘が皮をなめす仕事を見る。イエメンでは古武士的な男がジャンピア（短剣）をさして出迎えた。

40余年にアジアのほぼ全域を歩く旅は原則的に一国主義を貫き、都会では大学や博物館を訪れる。もっぱら農山漁村を訪ね民家に泊まり暮しを体験。家の中の“もの”は、中央の博物館では見られない、驚くべき線や形や色や模様を目を洗われる思い。内外多くの人の友情と親切さに支えられ、各地での生活文化の深さに魅せられ、40余年も旅を続けられた。おかげで四〇〇回を越えて、アジアのほぼ全域が歩けた。命ある限りアジアを歩き多くの方に真実を伝えたい。 つづく

### 原稿をお寄せ下さい

お陰をもちまして小冊子「たくみ」も多くの方々のご支援をいただき、無事に復刊24号を出させていただきましたこと、深く御礼を申し上げます。

本誌はもともとたくみを愛し、民藝に心をお寄せいただく皆様のための冊子であります。日本各地の手仕事のこと、伝承、祭り、暮らしのさまざまな話題や思いについて、またご愛用の品々のことなど、いつでも誌面を提供させていただきたいと思っております。どうぞご遠慮なく郵送、メールなどでお寄せ下さい。字数は「たくみ」誌誌面からご計算いただきました。また写真なども歓迎です。掲載文については粗品を差し上げます。

## 柳宗悦の書簡とたくみ創業のころ(一)

志賀 直邦

本誌先月号(第23号)に倉敷の武内

潔真宛の、たくみについての柳宗悦の書簡の一部を紹介したが、その手紙の後半部分もやはり念のために記しておく。たくみは「一見工人を搾取する仲介者と思われませんが、事実はそののではなく、今迄は一度も黒字とならず、近い将来を期して努力しておる次第で、しかく不当な値をつけ、工人を虐げる意志は毛頭ないと思います。特にお話の伊東や展は、私の知る範囲では伊東やの不誠実によるので、『たくみ』のみを責めるわけに参りませんが、『たくみ』も売れし場合は殆ど感謝される事なく、売れぬ場合は常に不平の矢おもての立ち、同情する点もありますので、不悪<sup>あしからず</sup>お思い下さい。小生も山なす用重なりて行き届かざる事多く、方々へご迷惑かけ、本来の志と相反し

誠に相済まぬわけです。」

ところで「伊東や展」と柳が書いた催事について少し補足しよう。これは柳の武内宛の別の手紙によると、伊東屋を会場とした「倉敷工藝展」のことで昭和九年四月頃のことらしい。柳の

二月二十二日付の手紙によると、

「さて、伊東やに於ける倉敷展、色々話し合いし結果こちら側のものは『たくみ』を通して出品する事になりました。それで次の品を三月一パイに『たくみ』宛お送り希えませんか。

(一) 酒津焼、代表的なもの二十点位

(二) 其楽堂の品十五点位

(三) 籐椅子

一、例の高島やに出せし品にて、小生買ったく思ひお預かり希えるセツ

ト、此分すぐお届け被下<sup>くださ</sup>らずや

二、背の高きもの六客分「工藝」所載

(図あり)

三、(籐椅子の図、背もたれ三図)

背の模様の違えるもの三種デザインしたかと思いますが、右を各々六客づつ

右に合える小卓各々一つ。

運賃は『たくみ』で支払います故、出てくるもの先にお送り下さい。是等は凡て返品なしにします故、充分よくお作り希います。」

柳はその頃武内を通じて、倉敷で籐椅子や小卓子を作らせていたようで、それに関する書簡はほかにもある。

さて、雑誌「工藝」を創刊した昭和六年(一九三一)頃から民藝運動はより本格化していった。さらに吉田璋也による鳥取のたくみ工藝店の開店(一九三二年七月)、そして翌年十二月の東京たくみの開業、それにつづく日本民藝協会の発足(一九三四年六月)は、運動をより組織化されたものとして展開する契機となった。

そして柳がそれまで再々強い念願と



戦前のたくみの外観

して述べてきた民藝運動の、現状調査と啓蒙、復興と新作への取組み、そして用としての普及という、かつて今まで誰も試みたことのなかった実践的な活動は、一九三六年十月の日本民藝館の開館として結実していった。

それらのすべての過程において、柳が中心となってまさに超人的な働きをしたことはいまでもない。だがその具体的な情況については、彼の論稿や日記にはさほど記述がない。柳の、その時々の場合への目配り、手配りをもっとも端的に表しているのは、そのおびただしい数の書簡にあると私は思う。

柳宗悦全集には第21巻の上、中、下と第22巻下の補遺を含め四巻にわたって凡そ数千通の書簡が収められている。年代は明治三十七年（一九〇四）の少年時代から最晩年の昭和三十六年（一九六一）にかけてである。情報や思考を主として書簡という様式で人に伝えた時代であったとはいえ、柳のその対象は身内から知友人、民藝の仲間、地方の工人まで多岐にわたたり、時代のまさに証しでもあった。

たくみに関しても多く触れているが、ここでは東京たくみ開店直後に柳が出した二通の手紙を紹介したい。一つは昭和八年（一九三三）十二月十九日付で京都の河井寛次郎宛のものである。

『たくみ』開店、順調の出発で悦んでいる。今のところ日に三百円以上の売上故、まず盛況と思う。店構えは庫造風にしたので中々特色が出た。この店では今後我々の仕事は一切の統制を

計るようにしたく、毎日皆と逢って色々相談している。これからは益々品物の向上を計りたい。安来の木工品安着、店では品物が相当に要る事が分つたので、何か出来次第今後も続けて送ってもらえると好都合、今のところまだ島の品数が足りない。――水谷、森両兄と小生、来る二十三日より会津本郷行、帰ってより多分一同で九州か四国行」と記し、河井の同行を誘っている。

翌昭和九年一月十日付、島根の森永重治宛の手紙には、「今度の九州の旅は非常に収穫でした。――明日からもまた旬日ほど奥羽の旅に出ます。雪深く奥地に入ることは困難ですが相当の結果はある見込みです。『たくみ』は目下集めてきた品物で埋まっています。」とある。

当時のたくみが、まさに柳たちの運動の主要な一部であったこと、そして柳の四十五歳を頂点として、同人の殆どが三十歳代であったことを思うと、あらためて感慨を禁じえない。

## たくみ歳時記 端午の節句と 郷土人形

桜が散り澄んだ空に鯉のぼりが舞う季節となりました。五節句の一つ、五月五日の男の祭りは、菖蒲を活け粽や柏餅を食べ、男子の息災を願う昔からの行事です。

鯉のぼりは関東では埼玉の加須が産地ですが、たくみでは室内用として越中和紙の紙子で作った小型の品を扱っています。

張子人形では伝統ある埼玉春日部の



鯉のぼり (大分別府)

武者人形が大振りで力強く、造型としても見事な作です。作る人は二人となりましたが作り続けてほしいものです。

土人形では大分別府の品が秀逸で、鯉のぼり、武者人形、金太郎、鯉乗り金太郎などがあり、古格を伝えながらも可愛らしい人形です。



左から武者人形、金太郎、鯉乗り金太郎 (大分別府)

## あとがき

朝の横須賀線で外国人のカトリックのシスターと親しくなった。何のことだったか声をかけられて、偶然従姉と同じ修道会だとわかって家族的な付き合いもするようになった。アメリカ人とフィリピン人の二人である。

どちらも日本に来てから長く、仕事は心のケアが主なボランティア的なものと聞いたが、驚いたのは“座禅”の修業が長く、時たまドイツや南米などへも指導に行っているという。

キリスト教の修業の中には“瞑想”というのがあるが、いまカトリックでは佛教の“禅”を同義のこととして認めているのだろうか。昨年はタイの少数民族の村で土俗信仰と共に祈り、多くを学んだという。世界は一つ、そのための一粒の種であろう。(S)

発行 株式会社たくみ

東京都中央区銀座八一四―二

発行責任者 志賀直邦

電話 〇三―三五七―二〇一七

FAX 〇三―三五七―二一六九

振替 〇〇―一〇―二一三五六五九

定価 六〇円(税込)